

<開催日時>平成29年2月18日(土) 16:00~18:00

<開催場所>槻の木高校応接室

<出席者>

[委員] 木村 勝 委員、田中隆夫 委員、宮坂政宏 委員、山本冬彦 委員

[学校] 竹下健治 校長、奥谷彰男 教頭、河嶋憲治 事務長

山本 尚 首席、田中 眞 首席、奥本雅俊 指導教諭、藤田 稔 教諭

1. 学校長挨拶(竹下校長)

2. 座長挨拶(木村PTA会長)

3. 報告・協議

<話題提供1 学校教育自己診断の結果、分析>

(別紙)をもとに説明(奥谷教頭)

山本委員

文化祭や体育大会のところで点数が低いのはどこの学校でもか、この学校の特色なのか?学生を文化祭の補助と言う形で毎年、各府立高校へ大学生を派遣するが学生がどういう風に役立っているのかが気になるところなので、この数字が気になった。全体と比べてどういう状況なのか。だいたいこういう風なことなのか。これはこの学校のことだけのことなのか。

奥谷教頭

他校との比較はやっていないのでわからない。

田中首席

体育大会・文化祭ともに実施後は90%以上の満足度がある。私も他校の経験がないので比較は出来ないが、本校の体育大会は「体育祭」ではない。一般によく聞く体育祭のように応援団があってダンスをしてということはしておらずに体育授業の発表の場として3年生集団演技を主としてそこに持っていくために活動している。思うところのある生徒もいるのかと思うところもある。文化祭は学校の敷地の問題であったり施設の問題であったりで、模擬店や飲食模擬店が出来ないなどがあるので、実施して楽しかったが他校の話を聞くと「自分たちもそういうことがしたかった」と感じているのか。だから時間が経てばこのように数字が低くなるのかと思う。

山本委員

「クラス全体で学校行事に取り組んでいる」と言うところは割りと高い数字になっている。そのギャップに何らかの意味があるのか。

藤田教諭

私見であるが、ほぼ田中先生が言った通りである。ただバランスの関係で非常に難

しいことであるが、本校で一番足りないと思うのは「生徒の自治的な活動」がこれまでの学校に比べて非常に弱い。生徒の力で何かをするなどがかなり弱い。ただそれをやらずと学校が乱れるのかという意識もこの学校にはあると思う。ある程度の型にはまったなかで考えさせると言うことであるが、担任やっけていて感じたのは考える部分はそんなにある訳ではない。普段の生徒会活動はどうかと言うと他校に比べて、昼休みに集まっている回数なども少ないと感じる。真面目な生徒たちが多くて「言っても仕方ない」という雰囲気になり、直後の高揚感があるときに聞くと満足しているが、冷静になると「やっぱりやってない」という意識が芽生えるのではないかと思う。来年度からは文化祭をもう少し充実させようということでも夏休み明けも文化祭準備の時間を今までより増やして、力をつけてもらうようにした。

宮坂委員

文化祭などの学校行事も当然学校教育の一環であるが、結局目指すところはどこなのか？という問題もある。体育大会や文化祭や修学旅行を通じて子どもたちにどういった学力をつけるのか？どういった成長するための力をつけさせるのか？成長する力や学力と言うのはいろんな要素（タキソノミー；ブルーム理論参照）があるので、その学力の要素を見て「槻の木スタイル」の学力の要素はきっちりつける。そういう目的を持って行事もやっけていくことも必要である。何でもかんでも求めづらいのも良く分かるので、生徒が満足することを目的に自主的にやらせているが、生徒の今までつけてきた力や、集団活動を通じて身につける力、もともとの自立性を持っているので、自主的にやらせても出来る部分もあると思うので、そういうことも考えていただいたらいいと思う。例えばアンケートの「内容は充実している」というのは模擬店が出ていれば充実しているということであるのであれば、それは教育的に見てどうなのか。そしてプログラムがいろいろあってほかの学校はこんなにいろいろなプログラムでやっけていのに本校はそうではない。だからこの内容は充実していないと思っているだけかもしれない。たとえば「文化祭や体育大会で友人関係が深まった」のならば教育成果としてはそれはそれで良い。いったい何を目的として行事活動を行っけていくのか？プログラムがたくさんで豊かであればいいのか？模擬店があったらいいのか？そういう風な視点も考えてもらって、やれば良い。だから44%や50%というのは低いのか高いのか良く分からない。なぜ充実していないのかと聞いたら「他の学校と比べたら」「プログラムがぜんぜん充実していない」「ダンスや演劇の発表も音楽のパフォーマンスもない」と言う話になっているのかも知れない。

木村会長

私がこの3年で感じているのは、学校のなかでルールが厳しく決まっている。枠がきっちり決まっけていて、やっけて良い事と悪いことがきっちり決まっけている。子どもたちは自分たちで考えていろいろな事をやっけて行きたいと考えている。このマイナスポイントの中に意欲のある子が意欲あることをやらしてもらえない不満もあるのでは。凄くやる気のある生徒と、全くやる気のない生徒がいて、その間の不満もある。やる気のある人がやる気のない人をフォローして何とか文化祭をしいると3年間とも聞いている。そういうものもこの点数に表れている。対学校と言うことではなくて、若い

やる気のある人というのはいろんな事を考えて自分たちでやりたいと思っている。けれども学校で枠にはめられているし、生活指導はルールが厳しくあるが、この時くらいはという思いを持って、やりたいことをやらしてもらえないマイナスポイントがあるのではないかと？しかし私は点数が低いからだめだとは思っていない。それだけ考えて答えているから点数が低くなっているのだと思う。真剣に評価をしているのであろうと感じられる。

山本委員

生徒自身に考えさせると言うことが大切である。原則論で言えば、もしそうでなければ、それは行事としての教育の意味は全くない。自発的に自分たちが出来ると言うのを育てるのが行事である。もしそういうことであればこれは抜本的に考え直してもらわないといけない。全体の学校の生活の流れのなかで位置づけると言うのは大事である。いわゆるイベント主義ではしんどい。そこをどう積み上げていくか？打ち上げ花火みたいであるから実施直後の満足度が高いということになる。満足度があれば絶対にそういうことにはならない。ここがそうだとやっているのではなく一般的にそうである。一般的にみてそういわざるを得ない。それは難しいことだと思う。いま指導要領の改訂でアクティブラーニングという英語のことばが日本語に言い換えられている（主体的、対話的、深い学び）が、自主性を育てると言うのは自立して社会のなかでどう生きていけるか？そこで意味を持つ学力というのが、一番基本のところだと思う。どういう目的でやっているのか？ということが大事である。

木村会長

お祭りのイベントを子どもたちは楽しみにしていると思う。大人でもだんじり祭りが終わったら翌日からは来年の祭りに向けて準備を始めるほどである。そのだんじり祭りがあるから仕事を頑張っている。生徒も企画をしたり話し合いをしたりすることが社会に出て絶対力になる。当然学校は勉強するところで勉強が主になるのであるが、年間を通して取ってつけたように行事を企画させたり、まるでおまけのような扱いをされると子どもたちのテンションも上がらないのでは。本気で取り組ませるような持っていき方を工夫してもらえれば。大人になって会社に入って何かを企画していくためにはこういう力が大切であるので、真剣に考え、取り組むようにする必要がある。もっと早い時期から徐々に集まらせて話をさせるなど社会に出てからの訓練になるので行事も大切だと言うことをもう少し生徒に伝えて欲しい。そうすれば充実度は上がると思う。失敗をしても充実し、良い経験になると思う。

山本委員

そこから課題を見つけられるから。

宮坂委員

体育大会や文化祭に生徒自身がどういう意義を持っているのか？「こんなものいい加減にやっておいたら良い」という意味なのか、もっと盛り上げるために私たちなりにこう考えてこういう風にやりたいと考えているのか？そういう部分がどうしても必要である。ルーティーンのようにやっているのであれば間違っている。これはキャリア教育にもなる。そういう意味で言えば役に立つと思う。

山本委員

だから「勉強と言うのはそのためにするのである」と伝える。そういう位置づけがキャリア教育である。どうしても受験が終われば勉強をやめてしまうという。文部科学省のプロモーションビデオを見ると盛んにそのようなことを言っている。勉強は嫌いだけれどもやる。大人になって勉強を続けるかと言うとそうではないという数字が出ている。日本の教育の1つの問題である。100%正しいか分からないが。生活が充実するから勉強の意欲もわくと言うバランスは大事である。祭りが終わると来年の祭りの準備をするように年間で考えてやる。そのために何をしたら良いのか？ということであると思う。

竹下校長

今言われた通りで、本校の体育大会と文化祭は見ていただいたら分かるとおりの大変良いものである。本人たちも充実していると思う。ただ、よく考えてみると、これは自分たちが作り上げてきたものかどうなのか？と考えた時には学校が設定しているものではないかと思ったのでは。宮坂委員が言われたように彼らは本当に自分たちでやりたいと考えている。この数字は実は前向きである。終わったばかりの高揚感で満足度は高いがしばらく考えてこれは学校が設定したものではないか？自分たちでもっと出来るのではないか？というものの数字である。私はここには良い問題があるのではないかと考えている。だから次のNEXT STAGEでも話があると思うが、彼らを主体的に動かそうと思う。大きなフレームやスピリットを変えずに主体性や自主性を揺さぶっていこうと思っている。

山本委員

それをやろうと思えば慎重に議論してやらないと、変にやろうとするとマイナスである。

木村会長

教員の足並みをそろえて欲しい。校長先生が考えておっしゃったことがどの先生に生徒が聞いても同じ答えが返ってくるようにして欲しい。生徒はどうして良いか分からなくなる。そういう不安などもこのアンケートに入っているのではないかという気がする。

山本首席

本校が14年前の創立以来任務として、仕事としてどこに力を入れてきたかということ、基本的には学力向上である。文化祭や行事を軽く見ている訳ではないが、我々が他の学校を経験して来たなかで「生徒の受けの良い文化祭」も見てきている。それはまさしくイベント主義である。その教育的効果や努力効果をみるとそれはクエスチョンマークであるという取り組みをずっとしてきた。この数字を上げるための努力は学力向上のための努力はやりたいけれども、これについては慎重に船出するべきである。まだ14年しかたっていない。一歩目の櫂の木らしい文化祭や体育大会は随分形は出来上がってきている。アンケートも実は細かく言うと「体育大会は良かったか？」ということ「良い」のです。けれど「内容は充実していましたか？」ということ「悪い」

となるのです。内容は充実していないかもしれないが生徒たちは「良かった」のです。その方が教育的ではないかという事です。なぜならば設定しているのではないからです。生徒たちは「内容は充実していない」かもしれないが、いっぱい楽しんでいるのです。それはその時のテンションが上がっているからではなくて、冷静に文面を見ている。その分も過分にある。だから実際に保護者はその数字は違います。周りから見ている者にしてみれば、体育大会は槻の木らしい体育大会だという評価をもらっている。ただ充実していたかどうかとなると生徒の判断は少し違った。でも我々の教育の責任のなかで体育大会はまずはこの程度でいって、あとは生徒の判断で楽しむのは生徒が頑張れということだ。そこを放っておいて頑張れというのは無責任である。頑張れ方の方向は教える必要があるし、事前の準備などで丁寧に力添えしてあげるとするのは必要である。この14年間のなかで最優先にして来たのは学力向上である。次の我々の教育課題はここからの舵取りである。今までの様々な学校がやってこられた体育大会の総括は楽しいかもしれないが三角や×もあると思う。それを踏まえてトータルに考えて槻の木の文化祭や体育大会はどうしようと議論は必要である。生徒のほうは「もうそろそろ信用して欲しい」と考えているのでは。それは貴重な意見であり、我々の中でも「もう少し羽目を外しても良いのでは」という意見も若干ある。

山本委員

そのリスクを教員がどこまで責任を取るのかということである。

山本首席

少し踏み込んで良いかというのはそろそろ感じたこともある。

<話題提供2 NEXT STAGE の報告>

(別紙)をもとに説明(山本首席)

宮坂委員

NEXT STAGE についてお話す前に山本先生が仰ったなかで学校がPDCAサイクルが進められていて、そのマイナスの産物として思考停止状態になっている。これはよく言われる「前例踏襲主義」という状態に多くの学校がなっていることが様々な問題を起こしているといわれている。子どもの実態、社会の実態から始めるということが大切である。政策評価でもPDCAのなかでDをおもに評価する。Dだけで、「何を実施したのか」「どうだったのか」になってしまう。そうではなくて「Pのほうを評価しなさい」ということである。Pが一緒であればどうしても前例踏襲になってしまう。Pの部分要如何に作っていくのか。そのためには生徒の実態、生徒の過去、未来がどうなのか。生徒というのは生活を通して社会と繋がっているなのでそのなかでどう生きていくのか?である。それを考えるとこのNEXT STAGE というのは当然出てくると思う。先生は忙しくてそのようなことを学校教育の中に入れ込むというのは難しいかもしれないが、背景が大切である。理想を言えば、全ての学校教育活動の中でこういう風なことを考えてやって行くことが府立高校で大切なのではないかと考えている。もう1つは山本先生がイベント主義だったらダメと仰ったが、そうだと思う。企

業人の話を聞くとなったときに、大企業という看板で人が来て話をすれば良いというものではない。その人が企業の中で積み上げてきたものがどういうものか人生を歩んでくるなかで企業人として、家庭人として、社会の中の関わりのなかでどういうことを自分自身が積み上げて、構築してきたのか。そういう話を生徒にして欲しい。ということだと思う。それならば何も大企業でなくても良いわけである。企業から来てもらうというよりは、人選が大切である。さらに、豊かな人をあゆまれている自分自身が相対化されていないと話が出来ないので、自分自身も相対化できている方、そういう方を呼んで話をしてもらいたい。そう意味ではどういう企業でも良いと思う。このような属人的な部分と、別途、企業や職の特性というものがある。職の特性というものも活かしながら、バラエティを富ませて話をしてもらいたい。もう一つは職の中身です。例えば気象予報士を呼ぶということであれば、これは職の特性ではなく職そのものの内容についてである。企業では今AIなどに力を入れているのでやっているから、そう人を呼んでくる。そういう風なことを考えてバランス良く配置していただいたら良いのではないかと。

木村会長

宮坂委員と同じ事を感じている。私たちの先輩が生きてきた時代とこれからの3・40代とでは2・30年間の世代ギャップがあって、当然世の中は変わってきている。我々の10代の話を自分の子どもにしても何の意味もない。世代や時代が変わっていくなかで常識は変わっていく。色々常識は変わっていくけれども、一番忘れてはならないものは「情熱」みたいなものである。先生方もそうであろうし、我々企業人も世の中にとって自分はどうか役立っていくのかという志を呼び覚ますような機会にこのNEXT STAGEが役に立てばと思う。今のプログラムが良いとか悪いではなく「自分がこのように研究した先にはこうなれるかも」「自分が世の中の役に立つためにこうなれるかも知れない」と見えたり、目指したりするきっかけになれば。大きい志を持って欲しい。ひとりひとりの適性に合った、自分の可能性に気付くことができるような、本気で目指すことの出来るゴールになれば頑張れるのでは。その「情熱」を持っているところを見せて欲しい。社会を見ていると、大企業であっても40代で「人生が終わったような眼」をしている人もいる。組織の中に入ると可能性がなくなったり、出世の眼が無くなってしまったりするために、食べるためだけに働いてしまう。そのような諦めている担当者や生徒たちとでこのようなことをやらせて欲しくない。自分の親のような年齢の人の話を聞いた時に「やっぱりすごいな」と感じる事が出来るようなことが、最低限必要である。若い人の情熱に火がつかなくなったら、日本はどうかというのもある。日本の本当の良さを知り、日本をもっと良くしていくんだということをしっかりと考えさせるためにも、日本人として誇りを持つように、目標をもってNEXT STAGEや海外研修を含めて注力して欲しい。そこに関しては妥協せずに企業を選んで欲しい。探していくお手伝いも協力要請があれば、PTAも動きますので、協力して良いものにして欲しい。

山本委員

ポイントは事前指導にある。ある程度先生が準備せざるを得ないが、生徒が自分で

選んだり決めたりという要素もいる。一から自分たちで探してきなさいという訳にも行かないであろうから、出すのは悪いことではないが、そこに入っていきにあたって、事前にそこで何を学ぶのかということが、ある程度生徒たちにこなしていく事が一番重要である。それがあれば事後指導はきちんと出来るのではないか。そして次に繋げることが出来る。一回きりにすることなく次に繋げるためには様々な工夫の仕方がある。教科の学習に繋げるなど流れの中に位置づけられるかが次のポイントになる。こういうものは取りあえずやってみるということも大事であるが、お聞きする限り、ポイントは事前指導の部分でどのように生徒たちの興味関心とマッチングさせるかが重要である。

山本首席

去年の学校協議会で木村会長が「何になりたいかではなく、どんな人になりたいのかということが大事だ」と言われたが、それが残っている。事前研修というのは「どんな人になりたいのか」というまさにそこで、「どんな人に会いに行くと思う？」というところからアプローチする。会社の名前や研究ではなく結局は人間性に心打たれたという、そういうイメージを経験した。それで良いと思う。実は物理の研究室に行くといっているにもかかわらず、半分以上が文系の生徒が応募して来た。別にそういう事はどうでもよくて、人間性を見に行く、どんな人になりたいのかを見に行くのであれば、何を研究していても関係ない。企業に行った時には親でもそういう話はしてくれないという話をしてくださった。それは生徒たちをととても大切な娘や息子と思って話してくださったということを生徒に話すことで、そういう人柄に惚れ込んでしまうということがある。そう人になりたいというきっかけになれば良いと思う。先ほど事前指導という話も出ましたが、まさにそこも大切で、まずこちらの意図を理解してもらおう企業の方との面談が大事である。下積みや準備が大切であるということも若い頃から教えてもらった。それをやるとそういう話をしてもらえるとともに、若手にそういう経験をしてもらうことが出来る。成功の要因には実はこれがあるのだということも教えることが出来る。その経験が新しい取り組みをすると経験できる。

山本委員

それと話してくれる人にどういうメリットがあるのか？ということ。そこがどうなっているのか？

宮坂委員

私もそこが気になった。よく中学校で職場体験などを行っているが、企業は最初嫌がっていたが、中学生が1週間位来ると企業にもものすごいメリットがあるという話である。どういったところが参考になったのかまでは知らないが、とても参考になって自分の仕事にこういう意義があったというのを再認識できたということをよく聞く。たとえば、活動を続けていくのであれば、大学側にもメリットを感じるようなことがあれば良い。

山本委員

若い人をお互いどう育てるのか？というのが1つの切り口ではないか。向こうのメリットというよりお互いの社会貢献である。企業の側もこういうことをするというの

は企業の責任の一旦であるということが一つある。そこをきちっと詰める。連携は課題が共通でないと連携ではないという大原則がある。ただ見えないところもあるので行っていくなかで明らかにしていくというのも大切である。取りあえずやってみるという事は大事だけれども見通しはつけておいたほうが良い。向こうにどういったメリットがあって、それが向こう側でどう広がっていくのかということは議論しておいてもらったほうが良い。大学でも一般企業と交流をしたことがある。そこで「大学でも企業でも若い人を育てていかなければいけない」という結論になった。

宮坂委員

田中先生のところで真剣な稽古を見せるのも良い。

田中委員

能の見学や体験講座などいろいろさせていただきたいと思っています。先日2月5日に「子どもと仕事」というタイトルで、主催・子どもとしごと実行委員会、後援・高槻市教育委員会で開催。小学生の子どもたちに色々な職場体験をさせるということでいろいろな業種に分かれ体験をした。私もその中で能楽師として参画。9名の子どもたちがやって来て、約2時間の講座のうち60分以上は正座をしていた。体験のはじめは、私の謡いと舞を見せたものだから少し面食らっていたようだ。初めて経験する謡と舞に、驚きと緊張が増したようだ。次に足袋を履かせて舞台ですり足を体験させたり、実際に声を出し謡の稽古も行った。子ども達が一番喜んだのは実際に能面を付ける体験でした。少しずつですが緊張も解れ、講座中は結構活発にしていた。

最後は野見神社境内で数年前に薪能をしたときのビデオを見たりし、講座を終えた。保護者もきていたので親子で体験。親のほうが食い入っていた。伝統芸能は「礼に始まり、礼に終わる」というので「きちんとご挨拶しましょう」ということできちんと正座をして行った。私は敢えて最初に挨拶をするときに「ちゃんと正座をしなさい」と強要したわけではないが、事前に学習して来たようで「こういうところに行くのであればきちんとしなければいけないのであろう」と事前に学習してきたのでしょう。

今回の企画にあたり、伝統芸能を通して子どもたちに学びというのは非常に大事だと改めて思う。学びのなかで技術的な事より礼儀作法を一番厳しく学び、挨拶ができないというのは最も辛いものだと思う。まず第一段階はそこだと思うので、顔を見て挨拶できるようにという導入が大事である。当然勉強なども大切であるが、そういう人としての普通の当たり前のものとしての育成をお願いしたい。そのために NEXT STAGE に書いていただいている事につき、お手伝いできることがあればさせていただく。が、20名も集まるか心配である。

4. 各委員よりの提言

木村会長

時代がどんどん変わっていくなかで皆さんも報道でお知りのようにコンピュータやロボットの進化で無くなる職業が相当あります。私はうちの社員にも色々なところで話をするが、人間しか出来ない事はコミュニケーションである。機械では出来ない部

分であり、何年経っても残ってくる。逆に残していかないといけない。そこを磨かなければいけない。人間関係の基本は自分の事を信じ、相手も信じる事。自分も認め相手も認める。お互いに認めてコミュニケーションを磨かないといけない。私は工事の仕事もやっているがサービス業という位置づけで指導している。今の高校生はある面では大人であるが、守られすぎてまだ大人に程遠く見える。コミュニケーションを磨くような、将来時代が変わっても生き残っていけるような生徒に指導して行って欲しい。いきなりは変わらないであろうからこのような NEXT STAGE のプログラムを活用していただいて考える力やコミュニケーション力を磨いていただけたらと切に思う。今回で私も最後になります。ありがとうございます。宮坂委員

今の会長の話の中にも人にしか出来ないことという話があったが、スティーブ・ジョブズが「自分が今まで発明したこと、全財産をなげうってでもしたいことがひとつある」といっている。何かというと「ソクラテスと午後のひと時に紅茶を飲みながらいろいろ話をしたい」という。なぜかというとソクラテスというのは相手のことをきちんと理解する能力が高く問答法と言われ、相手から引き出す。スティーブ・ジョブズはなぜソクラテスを出したかということ、「原点に返って考える」「自分自身を引き出す」そういうことが大切なことだと考えていたからだと思う。今までなら「学べ」「覚えろ」であった。もちろんそれも大切である。素地やツールがなければ活用できないから。自分自身を引き出す。自分自身から引き出す。いろんな事を原点に返って考える。人でないとなかなか出来ないことだと思う。今日出てきた NEXT STAGE が「マナー化にならない」「前例踏襲型にならない」というのもそういうことだと思う。だから先生方もそうであるし、子ども自身もそうであるし、学ぶということ覚えるということ知識をたくさん身につけるといっても大切であるが、如何にそれを引き出していけるか。如何に原点に返っていろんな事を考えて活用していけるのか。そういうことも大切であると思う。ソクラテスと問答したいというのはコミュニケーションでもある。コミュニケーションを通じていろんなものを引き出してもらおう。これは何も人と人とのコミュニケーションだけではなく物とのコミュニケーションもあるかもしれないし、状況とのコミュニケーションもあるかもしれないし、社会とのコミュニケーションもあるかもしれない。あるいは芸術とのコミュニケーションというのものもあるかもしれない。それは人でないとなかなか出来ないことなのでそういうことが大切ではないのかと思う。

山本委員

前例主義とイベント主義というのは 90 年代の半ばに地元の小学校の P T A 会長を 3 年したときに大きな課題となったことがある。前任者から当時学校から急激に子どもたちが減っている状況で P T A 少ししんどくなって P T A 改革をやって欲しいという引き継ぎを受けた。これがおかげさまでうまくいった。どういう風にしたかということ、いま菊池桃子さんが言っている、PTA は自由参加（任意加入）がどうかという議論があるが、その考え方を生かそうとした。N P O 方式にしようとするとう校長先生が困っていたが、「自分たちで考えて前例主義ではない自分たちで決めることができる P T A にしましょう」といってうまくいった。私の人生のなかでそういう機会がなかったが、

基本になったのは「自分たちで考えて自分たちで決める」ということである。去年にしたことを必ずやるということではなく、新しい事をどんどんやってみて、ダメだったら次の年はやめるということがひとつ。イベントでも今、自分たちがやらなければいけないことをやって、すぐにやめる。NPO式のことを取り入れた。こういうことでやっているとはPTAのお母さんが「PTAって自分たちで変えることができる」と言っていた。それは当たり前の話で、組織はそうあるべきである。他のPTAでもそれが出来たかということ必ずしもそうではない。そういうことが自分の人生の体験になっていて結局今の話と繋がっている。子どもたちの様子はどんどん変わっていく。組織であるから考えないといけないところはあると思うが、現状にあわせて新しいアイデアをどんどん出していき、そういう活力はあるであろうと思う。前向きに考えるというのは「それだからやっていける」という、組織を維持することだけというのは大変であり、当たり前のことをやっていくが、それをやりつつ新しい課題にチャレンジすると新しい展望が開けるというところでみんな頑張るのである。そういうことを改めて感じた。学校協議会では学校の状況でいろんな議論があって、色んな多様性があると今日は学ばせていただいた。今後ともよろしく願いいたします。

田中委員

中身の濃い、教育に非常に熱心に取り組んでおられる会である。話は変わるが3月4日の槻の木高校の卒業式の日には第7回たかつき市民能が行われます。そこに第一中学校の生徒235名を招待していますが、実は国語の先生から電話をいただいて話のなかで「実は能を一度も見たことがない」とおっしゃって、中学校の教師のほとんどが能に触れたことがないということであった。日本の伝統芸能ですよという話をするのだが、先生方にも触れていただけたら嬉しい。なにかお役に立つことがあれば今後ともよろしく願いいたします。